

残像

Powidoki (英題: Afterimage)

映画ライター 渡辺稔之

(九五八字)

profile

わたなべとしゆき 一九五九年生まれ。青山学院大学経営学部卒。アテネ・フランセ文化センターのアルバイトを経て、映画ライターに。新潮社のコミック誌『パンチワールド』―北斗の拳―、共同通信社のテレビ情報誌『T v f a n』に映画評論を、日本経済新聞朝刊日経プラス・ワンに映画人インタビューを寄稿。得意分野は映画史全般で、現在までに一万本以上の映画を鑑賞。

「灰とダイヤモンド」「カティンの森」のポーランドの名匠アンジェイ・ワイダの遺作。

一九四五年、社会主義政権下となったポーランド。ウッチ造形大学の教授で、前衛画家のヴワディスワフ・ストウシエミンスキは、芸術を政治に利用しようとする政府の方針を受け入れず、大学を追われる。美術館の壁から作品が排除され、ポーランド芸術家デザイナー協会からも追放された彼は、食料配給も受けられず、画材さえも入手できない。前衛詩人のプシポシや彼を尊敬する少数の学生だけが彼を支え続けた。困窮極まったストウシエミンスキは、学生たちの助力で市役所に雇われ、プロパガンダ看板を描く仕事を得るが、そこにも当局の手がおよび……。

冒頭、草原の広がる丘の斜面をゴロゴロと転がるストウシエミンスキと学生たち。続いて、牧歌的な景観の中で熱心に教授の理論に耳を傾ける若者たち。芸術の道を歩む師弟たちの情熱と

自由闊達(かったつ)な精神がみずみずしいタッチで描かれた名シーンだ。そんな自由な精神をむしろスターリン支配下の全体主義国家体制。政府が要求する社会主義リアリズムに反発し、破壊へと追いやられるストウシエミンスキ。ワイダは、誇張のないリアルな演出と透徹した視点で、自らの信念を貫き、圧政と闘った孤高の芸術家の姿を描き出す。ストウシエミンスキを演じるのはポーランドの名優ボグスワフ・リンダ。第一次大戦で片手片足を失い、松葉杖をついた生活を余儀なくされながらも、芸術への情熱で人生を切り開いていったストウシエミンスキ。その強じんな精神、良き父親ではなかったが娘ニカとの関係など、その複雑な人間像を抑えた演技の中に巧みに描き出し、ワイダ演出にうまく溶け込んでいる。

ワイダは初期の抵抗三部作で、第二次大戦の悲劇にスターリン政権下のポーランドを二重写しさせ、以後も数々の検閲体制と闘いながら、自ら

の求める映画を模索し続けた映画作家だった。高名な芸術家としての地位を失い、あらゆる権利をはく奪され、生活の糧さえも得られなかったが、それでも自身の芸術を追い求めた。人間としての尊厳を失わなかった男の、高い魂を銀幕に刻み付けた本作は、まさに不屈の生涯を送ったワイダの遺言と

いうに相應しい作品であり、今も世界のどこかで脅かされている「自由」の意味をわれわれに問いかけてくれる。

(二〇一六年)ポーランド/カラー/九九分/監督・脚本…アンジェイ・ワイダ/脚本…アンジェイ・ムラルチュク/撮影…バヴェウ・エデルマン/音楽…アンジェイ・パスフニク/出演…ボグスワフ・リンダ、ゾフィア・ヴィフワチ、プロニスワヴァ・ザマホフスカ/配給…アルバトロス・フィルム/六月一〇日(土)より岩波ホールにて公開



© 2016 Akson Studio Sp. z o.o., Telewizja Polska S.A, EC1 - Łódź Miasto Kultury, Narodowy Instytut Audiowizualny, Festiwal Filmowy Camerimage-Fundacja Tumult All Rights Reserved.